



さらしなの里



友の会だより

第31号

2014・秋



撮影：更級小学校校長の山崎一男さん 後方に冠着山（姨捨山）

更級縄文人、21名誕生！

できたての縄文服を着て、わらで作った冠かんむりをつけるかわいいうち更級縄文人に变身！この写真は平成26年度に入学した1年生が今年の縄文まつりのために自分たちで作った縄文服を初めて着たところです。縄文まつりの主役だけが着ている縄文服。これから6年間、縄文まつりのときに着る大事な服が完成しました。

縄文服作りは、6月から始まりました。縄文時代のことを学ぶために、さらしなの里歴史資料館に行き、館内を見学したり古代体験パークで遊んだりしました。見学するなかで、土鈴を作ってみようという子どもたちの声が多く聞かれたので、土鈴づくりも行わせていただきました。これらの活動を通して縄文時代や縄文まつりへの関心がだんだんと高まってきました。

この縄文服のデザインは、これらの活動をする中で生まれてきました。縄文服の材料は米袋と絵の具と接着剤だけという縄文時代にふさわしいエコを意識したものです。作るには技術とアイデアと時間を必要とします。子どもたちは、歴史資料館の荒井君江まがたまさんの指導で、古代体験パークで学んだ土器の模様、勾玉の形、縄文時代の生活をヒントにし、思い思いの縄文服をデザインしました。縄文服は米袋をはり合わせてつくりますが、切ったり、はったりする仕事と、絵の具を塗る仕事は、保護者のみなさんの協力を得て完成させることができました。完成した縄文服は、一人一人みな違って、どの子の縄文服からも縄文時代の特徴である生命観、躍動感があふれています。

1万年以上の歴史がある縄文時代からは今の時代に生きていくために学ぶべきことが多くあります。更級小学校は歩いてすぐのところ古代体験パークがあり、縄文まつりを中心とした縄文学習も行われています。この恵まれた環境を活かし、ふるさと更級を愛する心と、生きる力を学んでほしいと願っています。

（更級小学校1年担任 竹鼻泰晴）

棚田をめぐる、郷嶺山で句歌鑑賞



さらしなの里（旧更級村）に明治時代、月を楽しむ里山が整備されました。羽尾区の郷嶺山です（下に絵図）。今、白いさらしなそばをはじめ手打ちそばが味わえるさらしなの里展望館がある所。この郷嶺山と月、さらに棚田やそばも楽しもうという欲張りな集まりが10月4日ありました。主催は芸術文化を楽しむさらしなの里の住民グループ「更級人『風月の会』」。集まりは2部構成で、1部はまだ明るい4時半、展望館の駐車場に集合し、郷嶺山の西側の「姨捨棚田」を歩きました（左の写真）。案内は信州大学名誉教授（地震学）で明徳寺住職の塚原弘昭さん。姨捨棚田が三峯山方面からの地滑りによってできたことを、今も棚田のなかに残る岩などを示し、解説

してくださいました。1時間半の棚田ウォーキングの後、さらしなの里展望館で、郷嶺山に明治時代に建てられた俳句や和歌の紹介がありました。郷土史家の塚田哲男さん（2007年死去）の解説のようすを「風月の会」会長の塚田正志さんがビデオで撮影しており、それが上映されました。下の俳句や和歌の一覧も塚田会長がまとめたものです。私にも時間を与えていただき、「更級やいまは田毎に稲の花」という木甫の句碑（下の写真）を紹介しました。建立したのは、お弟子さんと妻でもあったかもしれない梅玉さん。裏側に「ただならぬこの幸せやきよの月」という自身の句も刻んでいます。「ただならぬこの幸せ」とはさらしなの月



六十年の白髪も月の明りかな 真練舎秋水（仙石・西沢重右衛門の長男）
心にも曇りなきよの月見かな 瑞雲舎鳳齋（羽尾・小河原岩吉の二男、三ヶ月屋を始める）
月に明け華に暮行人の道 月露舎花恵（羽尾・上水清三郎の長男）
十二ある中の一ツや月の十五夜 信月庵姨逕（八幡・代の人）
いまやとて仰ぐや月の山はなれ 三世禱富（信更町・信田の人）
姨捨にのしかかりたり大銀河 春人（栗原春人、東京の人、戸倉俳

にひたれた幸せだけでなく、木甫と一緒に句碑に「愛の証」を刻んだ幸せも読みとれるのでは。観音様のような姿の句碑と感想をいつてくれた女性もいました。懇親会では八幡区からおいでになった宮坂直子さんがご自身の短歌を披露してくださいました。そのひとつは「ひとときの唄い語りて静まりし遠き旅人握手し暮」。郷嶺山のすこし上にあるJR姨捨駅では夜景を見にくる人に地元壇の選者、平成4年建立）更級やいまは田毎に稲の花 木甫（下伊那郡鼎村の生まれ）ただならぬこの幸せやきよの月 梅玉（木甫の妻？）いにしえの月の都を人とはば雲井にちかき姨捨の山 大島浮名（石川県の人、初代更級村長の塚田雅丈に勧められてこの地に移り住む）世の塵を払ひ尽くして清かなるさらしなの山に月ならわむ しづ女（大島浮名の妻 静子 坂城の人）照る月の御影もさむしふる雪のこしろ衣冠着の山 藤原安貞

の民話などを披露するイベントがあるのですが、宮坂さんも披露した後の様子を詠んだものです。握手をしてきた人は童謡詩人として知られた金子みすずさんの娘、ふさえさん（88歳）。信州の旅でたちよられたそうです。物語たっぷり「さらしな姨捨」です。

なお今回の集まりは「後の月」の時事にあわせたものでしたが、厚い雲に覆われ、お月見はかきませんでした。（芝原区・大谷善邦）

古道沿いワタクボ地籍にある大岩とそこに抱かれた馬頭観音



大岩の中、一番上にある馬頭観音。江戸時代の明和年間（1764～72）につくられたもの

古峠越えの古道を復元

さらしなの里は、月の都として古代の都人のあこがれの地であった。そうなった背景には、さらしなの里の三島地籍を中心に、人々が村をつくって生活と文化を築き、その近隣には都と深くかわる政治の中心地があつて、都人の往来が盛んであつたからだと言われている。

さらしなの里を通つて京の都へ往来した人々は、御麓区と旧坂井村（現筑北村）の境にあたる古峠越えの古道を、さまざまに思いを胸に行き交つた。古峠を越えればあこがれの地さらしなの里、いとしい家族と恋人の待つ都へ通じる道…。

峠は思いを育み、思いを断ち切るところ。家族を思い、友人や恋人を思う愛とロマンの月の歌の数々は、峠道で生まれたのではないだろうか。

古峠越えの古道は、現代のさらしな人にとつても特別な思いを抱くものであつて、以前から郷土史家の研究対象であつた。すでに戸倉史談会のみなさんによる調査も行われていたし、その復元も模索されてきた。

おりしも、地元では、羽尾の郷土史家による古峠越え古道についてのパネルディスプレイ「風月の会」が開催が行われ、街道トレッキングブームもあいまつて、静かな古道ブームが起こつていた。

そうしたなか、悲願であつた古峠越えの古道の復元作業が、6月21日地元の有

志でつくる「冠着山の自然と文化遺産を保存する会」によって行われた。戸倉史談会の調査結果に基づくルート設定をし、草木に覆われた急な坂道を復元していった（古峠から北側斜面を下り御麓区まで）。古峠には説明板を立て、途中に案内板も設置した。

今後も保存活動は続く。最近の「古道を歩こう」ブームの中で、多くの人たちに歩いていただき、古代のロマンを感じていただけたら幸いである。

冠着山の自然と文化遺産を保存する会

事務局長 上水 清



古峠で古道の復元に取り組んだみなさん。左上の白いボードに古峠の歴史が書かれている。後方がさらしなの里の御麓区

